

# 森 鷗 外

高 橋 義 孝 著

ONE HOUR LIBRARY

新 潮 社

森 鷗 外

## 一時間文庫

---

昭和二十九年九月十日 發行  
昭和三十年二月五日 三刷

定價 130圓  
地方  
發價 140圓

著 者 高 橋 義 孝

東京都新宿區矢來町71

發 行 者 佐 藤 亮 一

東京都新宿區矢來町71

發 行 所 株式 新 潮 社  
會社

電話東京 (34) 7,111 (8)  
振 替 東 京 8 0 3 番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

---

印刷 塚田印刷株式会社 製本 憲專堂製本所

Printed in Japan

# 森 鷗 外

高 橋 義 孝 著

ONE HOUR LIBRARY

新 潮 社

一時間文庫

森

鷗

外



## I

森鷗外とともに、事實、上何かが終つたと私は思ふ。そして、夏目漱石とともに、事實、上何かが始まつたと思ふ。この意味で鷗外と漱石とが、明治から大正へかけて幾年の間、同じ國土のうち、その生をともしたといふことは、きはめて意味深く、鷗外と漱石とがすくなくとも何年かの間は一緒に生きてゐたといふ事實のうしろで、歴史の精神が——もしそんなものがあるとするならば——複雑な微笑を浮べてゐるやうに思はれてならぬ。ついでのことにいつておくと、ひとはこれまで鷗外と漱石とのきはめて對比的な關係に殊更注意することがなかつたが、これはたしかに怠慢であつた。しかしこの小さな本の中では、主として鷗外とともに事實上終つたものについて書かうと考へる。

鷗外において、私のいはゆる何かは完全に自己を展開させた。その所有する一切の可能性が吟味せられた。その何かは自己の力量や妥當性を、それがこれまでではそこでは試みなかつたやうな領域や平面において検討した。ほとんどひとりの人間にとつてぎりぎりの限度において、といつてもいいだらう。つまりその何かはさういふ意味において終つたといへるのだ。さういふ意味に

おいて終つてしまつたその何かは、だからこそまた逆に別の次元で、すなはち事實上ではなくて觀念的に一種の永生能力を獲得した。事實上完全に終ることによつて、かへつて象徴として不死身となつた。時代と場所とに身うごきもならぬやうに縛られてゐたものが、鷗外といふ軸を中心にくるりと一廻轉して、象徴の棲む平面へ飛び上つた。何もかも、事實上終る。終らねばならぬ。終るはずである。しかし、事實上終つて、終り切りになつてしまふものもある。恐らくそれが多くのものの運命だらう。だが、事實上終るといふことによつて、終りを持つといふ宿命を振り棄ててしまふやうなものもある。終ることがなくなる、といふやうなものもある。しかしそのためにはそれは完全に終らなければならない。ある人間において、さきにもいつたやうに、人間としてぎりぎりの限度において終るのでなければならぬ。このところで私は、ゲーテの「親和力」中のオッティリーエの手記にある「すべてその種において完全なものは、その種を超越する」といふ言葉を思ひ出す。——とここでその何かとは何か。

これまである何かがあり、それが鷗外において終るといふ風のいひ方をしてきたが、つぎに鷗外といふことについて書いておかなければならない。私のいふ鷗外とは、軍人だつた鷗外でもあり、杏奴さんや於菟さんのいはゆるパパだつた鷗外でもあり、文學者としての鷗外でもあり、考證學者だつた鷗外でもあり、作品「雁」でもあり、日記でもあり、短歌作者でもあり、山縣有朋の忠實な部下としての鷗外でもあり、鷗外全集の扉寫眞になつてゐる原稿の文字でもある。過去に生きた森林太郎といふ、さういふ人間だけを指すのではない。いふまでもないことだが、こ



の書物は森鷗外の傳記ではないのだ。私にも鷗外の傳記を作らうといふ氣はあるけれども、今のところ、色々な事情で森潤三郎氏の「鷗外森林太郎」以上のものは到底作ることはできない。これは斷るまでもないことだ。それからまたこの書物はいはゆる森鷗外研究といふやうな性質のものでもない。作品解説といふやうな性質のものでもとよらない。森鷗外研究とか作品解説とかいふやうに見える部分はむしろあるにちがひないが、この書物はさういふものを狙つてゐるのではない。この書物は「森鷗外」——過去に實在した一人の人間でもなければ、その人間が遺した業績でも逸話でもなく、それらのひとつひとつでありながら、それらすべてを足し合はせた上に、ある何ものかの加はつたやうな、「たとへば肉體と魂とから成り立つてゐるわれわれが、しかも同時に肉體を持ち、且つ魂を持つた、『あるもの』である」といふやうな意味での、つまり森鷗外といふ三文字が、便利だからそれをいひ現はすのに使はれてゐるやうな、何とも名づけやうのないやうなもの、結局「森鷗外」といふものについて語らうとしてゐるのである。簡単にイデエ・森鷗外といへばいいのかもしれないが、イデエといふ言葉は曖昧であるから、何もわざわざさういふ言葉の助けを藉りなくてもよからうと思ふ。さうするとやはり「森鷗外」といふよりほかに致し方がない。さういふ「森鷗外」において何かが終るのである。そしてその何かはつまるところさういふ「森鷗外」なのだ。すると「森鷗外」において「森鷗外」が終つたといふことになる。そしてその「森鷗外」は、「森鷗外」において終つたことによつて一種の永生状態に入つて行くといふ、一寸逆説的な、説明しにくい事情に私はまづ直面してゐるわけである。しかし追々さういふ

「森鷗外」について何か書いて行けば、私の内部のものも、さういふこんがらがった事情も、もう少しはつきりして行くことだらうと見込みをつけてゐる次第なのだ。今は、何はともあれ、何事かをまづ書いてみるのだ。私の現在のやうな場合、あることが頭の中にあつて、それを書かうと思へば書けるし、又、書くまいと思へば書かなくてもいいといった風なのではない。そのあることは書かなければ一向にはつきりしないのだし、それについてまづ書きたいのである。資料は蒐集され整理され、それを見いみい書いて行くといつたやうな、さういふ具合のいい状態に私はゐない。とにかく書いてみなければどうにも仕様がななし、書いてみたいのである。書けたものが意味あるものでもないものでも、それはどうでもいいことにする。そんなことは知つたことぢやない、とさへいひたいくらいである。

## II

鷗外研究家は、その作品「興津彌五右衛門の遺書」を論ずる段になると、誰もいひ合はせたりやうに鷗外の日記の大正元年九月十三日及び同月十八日のくだりを引用する。森潤三郎氏の「鷗外森林太郎」でもさうだし、唐木順三氏の「鷗外の精神」でもさうだ。ある作品を読んで、そのままに打ち乗てるのなら、それまでだが、少しそれに興味を持つと自然探索の眼を光らせて、舞臺裏ものぞいて見たくなるのが人情で、さういふ時、日記は恰好な手がかりになる。しかし日記をそんな風にばかり扱つてしまつてはいけなからう。ある人間の日記は、その人間の生涯の色々なことを少し詳しく知るための材料を提供してくれる貴重な資料であるにはちがひないが、さういふ資料であるより以前にまづもつて「日記」といふものであるだらう。そこでわれわれは検事のやうに探索の眼を光らせて、資料や證據としての日記を讀む以外に、あるひはそれより前に日記を日記として眺めるのが肝腎なことだと考へる。さうすると日記は、日記以外のものがわれわれに語ることはないやうなものを語りつけてくれるやうに思ふ。むろん日記を資料として扱はうとどうしようと、それは各人の勝手で、別に日記そのものが怒り出すといふやうなことはないのだ

が。

日記にはどうやら日記としてのあり方があるらしく、作品のあり方にそれを較べると、そこに大きなちがひがあるらしい。現にわれわれは「猫」の漱石とはいふが、日記の漱石とはいはぬ。

「猫」は、いつの間にか自分の生みの親であるところの漱石をはふり出してしまつて、「猫」として世間を歩きまはる。第一に「猫」、それから夏目漱石、最後が市民夏目金之助といふ順序が本當だらう。日記の世界ではかういふ順序は通用しない。日記であると、それはつねに夏目漱石の日記といふことでしか通用しない。日記は漱石や鷗外にかぎらず、誰でも書くから、「猫」や「雁」のやうな、つまり作品を目の前におく場合、それらの作品とわれわれ——日記も書くわれわれとの間の距離はひどく大きいのだが、これが日記なら、たとひそれが鷗外の日記であらうと、われわれとその日記との間には、作品とわれわれとの間にあるほどの距離はないわけで、作品がわれわれを作者から遠ざけるなら、日記はわれわれを作者に近づける。われわれは作品に對しては一種氣づまりな近寄り、がたさを感じるが、日記に對してなら逆に狎昵する。作家の日記をも含めてひとの日記の頁を繰る時、われわれは多少にかかはらず、ふん、どんなことをしてゐるのだといふやうな顔つきをしてゐる筈である。ところが日記にそんな狎昵の可能性があるからといつても、日記は意外にもその日記を書いた人間の内側のことはあまり説明してくれはしないのだ。日記は舞臺裏であり樂屋であるにはちがひないのだが、そこにおいてわれわれが捉へようとした役者は、いつも扮装して舞臺の方へ出てしまつてゐるのだ。舞臺はすなはち作品である。素顔の俳優は、

實は見たところで仕様が無いのだが、そこが人情といふものだらう。たとへば鷗外は日記の大正三年七月八日のくだりに「八日（水）。晴。暑さ稍と退く。」と書いてゐる。たつたこれだけのことからわれわれは一體何を讀みとればいいのか。何が讀みとれるのか。かういふ一例からも、日記には日記の讀み方といふものがあるらしいことに氣づく筈である。

一體、日記といふものにあつて肝腎なのは、讀まれるといふことではあるまい。ただ書かれるといふことのみであらう。（鷗外は、ゲーテのやうに、すくなくともその晩年には自分の日記が多くの人々に讀まれるだらうといふことを計算に入れて、日記を書いてゐたに相違ないが、このことはどうも大して重要ではないやうに思ふ。）これが手紙だと少しちがつて、書くことも肝要なら、讀まれることも肝要なのである。手紙では、書くことは讀まれることを前提とし、讀まれることは書くことを前提とする。意見や批評をしるした文章になるとまた事情がちがふ。さういふ文章では、書くことはむろん事實上の一要件だが、それは評論文全體の中では、或は書き手の心理からすれば、あまり重要ではなく、専ら不定の他人に讀まれることに重點が移る。日記、手紙、評論文といふ風に辿つて行つてみると、讀者についていへば、自分、特定の他人、不定の他人といふ具合に、讀者が次第に客觀的になつて行く。その幅が廣くなつて行く。己とかまた私とか個人といふものが次第にあなた、人々、世間といふものへ變つて行く。日記では一人よがりが通用するが、意見書では自分を殺すことがある程度避けがたい。筆者についてこの線を辿つて行くと、個人、その人らしさ、その人の體臭は、日記から手紙を経て意見書に及ぶうちに次第にうすれて

行く。そこでどうやらかういへるやうだ、日記をあるものための材料や資料や證據として讀むのではなく、日記を日記として、つまり日記以外の他のものからはどうしても讀み取ることのできぬものを讀まうといふのなら、それはその日記筆者の、體質とか體臭とか、性癖とか、さういつたもの、さういふ何かかう生物學的な意味での個人の生きてゐる様子、その人間のいのちのたずまひとでもいへばいへるやうなもの、その人間のいはば自然的な、前精神的な、いはば形而下的なものでなければなるまい。いふまでもなくわれわれは、より客觀的なもの、つまり世界觀とか思想とか、時代の潮流とか階級的イデオロギーとかも日記から讀み取ることができる。しかしさういふものは日記に殊更強くにじみ出てくるものでもなく、又、逆に日記といふ體裁はさういふものを盛るのに殊更都合のいい器でもない。世界觀の陳述に、月日だの曜日だの晴曇だのといふ年代的規定は決して必要ではない。さきにわれわれは日記に對して狎昵するといつたが、狎昵するのは、鷗外漱石同様われれも日記なら書くといふわけからではなくて、體臭とか性癖とかいのちを持つた人間とかいふ點では、實はわれわれも彼ら作家たちと全然同じ人間だからなのであらう。名犬と駄犬とが嗅ぎ合ふやうなものである。さてこれが日記を讀む法といふものであらう。この根本を承知してゐれば、あとはどうとも勝手に日記を讀むがいいのである。

さてまたここに一寸考へておいていい一問題がある。たとへば世界觀や階級的(客觀的)イデオロギーのやうなものが日記にも含まれうるやうに生命的、體臭的、自然的なものは、小説や評論文や意見書にも含まれうるわけである。さうだとすれば、自然的なものは、日記の獨占的内容

とはいひがたからう。自然的なものの必然的發現形式が日記だといつてはならないわけだ。それどころか、日記が含む以上に自然的なものを多分に含んだ「小説」や「詩」や「評論」もあるのである。だが一般には日記が最も大幅に自然的なものを含んでゐる。だからといつて、自然的なものゝ殊にはつきりと示してゐる「小説」や「詩」を、われわれは日記と呼びはしない。ここで肝腎なのは日記といふ名稱ではなくて、自然的なものそのものである。そしてこれは日記に最も多量に含まれてゐるわけである。そこで日記的なものといふ言葉の方がより正しいやうに思ふ。日記的なものといふ言葉が生ずるのは、ほかならぬ日記が自然的なものを最も多量に含んでゐるからである。そして自然的なものを多量に含んでゐる「ドラマ」や「意見書」は、この日記的なものの中に含めてしまつて差支へない。古來詩學で區分けするいはゆる文學ジャンルも、かういふ關聯からは結局便宜的符號以外のものではない。日記はなくとも、日記的なものの存在には差支へがないのである。

鷗外は明治三十二年六月、轉任を命ぜられて九州小倉に赴き、三十五年三月まで小倉で隊務に服した。その期間の日記がなかつたのに、近年古反故の中から發見せられて、鷗外の日記は現在のやうな形で遺されてゐる。

明治十七年八月二十三日より二十一年九月八日まで（約四年間連続）。

明治三十一年一月一日より十二月二日まで（約一年間連続）。

明治三十二年六月十六日より明治三十五年三月二十八日まで（約三年間連続）。  
明治四十一年一月一日より大正十一年七月五日まで（約十五年間連続）。

漱石の日記は全集版によればつぎの如く遺つてゐる。

明治三十三年九月八日より十二月十八日まで（約三ヶ月間連続）。  
明治三十四年一月より十一月十三日まで（約一ヶ年間連続）。  
明治四十年三月二十八日より四月十日まで（約半ヶ月間連続）。  
明治四十二年三月二日より八月二十八日まで（約六ヶ月間連続）。  
同年九月一日より十月十七日まで（約一ヶ月間連続）。  
明治四十三年六月六日より七月三十一日まで（約二ヶ月間連続）。  
同年八月六日より四十四年一月二十一日まで（約五ヶ月間連続）。  
明治四十四年五月九日より十二月十五日まで（約七ヶ月間連続）。  
明治四十五年五月一日より十月五日まで（約五ヶ月間連続）。  
大正四年三月十九日より二十九日まで。  
同年十一月九日より十七日まで。  
同年十二月頃より大正五年七月二十七日まで（約八ヶ月間連続）。

右の表からわれわれはつぎのことを知るべきである。鷗外の日記は、「閨漏を嫌ふ」といふ年



代記の消極的（或は實は積極的）な條件を完全に近いまでに満たしてゐるのに、漱石の日記は、年代記といふものを抑々否定してしまふ底の「闕漏」そのものだといふことである。この現象は、われわれに、鷗外と漱石との、それぞれの日記をわれわれがどう取扱つたらいいかについて指示を與へてくれると思ふ。すなはち鷗外の日記に見られる「闕漏」なき連続性は（むろんここにもいはゆる穴があるが、鷗外の日記の連続性がこの穴のただ見せかけだけの穴であることを教へてゐると考へる。鷗外は、もしそんなことが可能だつたとしたら、生れ落ちたその日からでも日記をつけ始めただらう）、われわれに鷗外の日記では量的なもの、つまり普通なら意味を持たぬ量的なものに注意すべきことを教へてゐるやうであり、漱石の日記の示す不連続性（正しくは反連続性）は、これを解讀するのに量的なものに目安を置くやうな方法を採用してはならぬことを教へてゐるやうだ。さりとて、鷗外の日記の示す不連続線は、耐忍力とか克己とか几帳面とか意志力とかいふやうな心的・心理的な概念をその内容、或は結論としてわれわれに語りつげてはゐない。なぜなら日記は心的・心理的なものの自己表現形式ではなくて、身體的なものすくれた自己表現形式なのであるから。

鷗外の日記は、分量の上からこれを見ると——分量といふのはごく當り前の具體的な意味なのであつて、日記の行数、字数のことである——明治四十二年に頂點があり、四十三年、四十四年と下り坂になり、四十五年、大正二年で少し上向きになるが、三年には再び下降し四年に再び上昇する。けれどもそれはもう大正二年の高さを超えるものではない。三年以降は下降の一途を辿